

白樺派に対する「人道主義」評価の起点

中山 佳奈

1. 国語便覧から見る白樺派評価

ここ十年ほどの間、白樺派をメインに据えて語る論文はほとんど見受けられず、現在白樺派が、研究的視点からどのように評価されているかを考えることは困難だ。そこで、白樺派が一般的に受けている、あるいは受けてきた評価について考えるために、国語の授業で用いられる副読本、多く国語便覧と呼ばれるものを調査した。一九五〇〔昭和二十五〕年以降、出版社ごとに最新のものを一冊ずつ、計十五冊を対象としている。この中で最も新しい資料は、二〇一四〔平成二十六〕年出版の、京都書房『国語図説』である。そこで白樺派は、「暗い現実を描く自然主義の「真」の文学にも、耽美派の「美」の文学にもあきたりない若い作家が明治末年に新しいグループをつくった。(略)豊かな家庭に生まれ育った彼らは、自己に忠実に生き、個性を伸ばすことを主張して、理想主義・人道主義の立場に立った^②」とされていた。調査した副読本のうち、一九八〇年代以降出版の八冊は、おおよそ同様の説明で、白樺派と「自然主義」の対立を示しながら、彼らを「理想主義・人道主義」と語る。『国語図説』の中では、「理想主義」、

「人道主義」のどちらについても、ほとんど明確な説明はなく、曖昧な部分が残ったままになっているが、比較的古い便覧の言及では、「理想主義」と「人道主義」は、説明の道筋が明確に異なる。

一九五三〔昭和二十八〕年の桜井書店『総合国語研究要覧』では、「各時代文学の特色及び文学思潮一覧表」という形で文学史を示すが、この中では「自然主義文学への反動」としての「新理想主義時代」に、「白樺派文学運動」が起こったとしている。一九六六〔昭和四十一年〕年の日栄社『総合国語学習要覧』、一九七七〔昭和五十二年〕年出版の桜楓社『必携国語国文学要覧』(一九六七〔昭和四十二年〕年三月に出版された、さるびあ出版の『国語国文学要覧』と同内容)も、「理想主義」という言葉を、「自然主義」に対するアンチテーゼとして用いている。「人道主義」は、「人道の理想を説き、人類の幸福を増進するを以て道德の最高の目的となし、従つて、同情や恵み、献身等、凡ての愛他的行為を本義とする。又近代人が自己の人間性を自覚し、あらゆる束縛から人間を解放しようとする運動及び理想」^③、「大正期に入つてトルストイの影響やデモクラシー思潮の勃興などから、次第に人類愛・人道主義をかかげるようになった^④」と説明され、彼らの作品や主

張へ向けての言葉であったと言えよう。一九六九「昭和四十四」年三月の明治書院『国語便覧』では、白樺派について、「〔無理想無解決〕の自然主義に對して、自己を明るく肯定し、人道主義的な思想を作品化しようとした」とあり、既に混用が見られるが、白樺派に与えられている評価のうち、「理想主義」は来歴を示し、「人道主義」は態度、作品に對しての言葉であったと概括できる。ただ、白樺派の作品紹介に目を向ければ、「人道主義」的作品として提示されるものはかなり限られている。二〇〇一「平成十三」年出版の東京書籍『新総合図説国語』で、有島武郎の「生れ出る悩み」を、「白樺派らしい人道主義が、一筋に個性をのぼす人間への隣人愛となつてはとばした作品」と、また同じ便覧の中で、志賀直哉の「十一月三日午後の事」を「人道主義、非軍国主義の感情が現れている点で好評だった」と紹介している。この他に、『総合国語研究要覧』では、有島武郎の項目において、「明治四三^三白樺同人となり、『或る女』等の作品を書き人道主義作家として重きをなす」とあり、『国語図説』内の、武者小路実篤の説明文中では、「学習院在学中からトルストイに傾倒。「白樺」を創刊して、『お目出たき人』（明44）『世間知らず』（大1）を発表した。次第に人道主義の色彩を濃厚にして、戯曲『その妹』（大4）などを発表」としている。後ろの二例は、作品に對して人道主義という判断を下しているとも、いなくとも取れる文章であるため、参考に留めざるを得ず、実質、作品と人道主義を関連させている便覧は、一冊だけと言えよう。作家一人一人に對してのコメントを鳥瞰したとき、「人道主義」的と評されることが最も多かった武者小路の作品紹介には、「人道主義」と直接的に結び付けられ

るものがなかったことも看過できない。作品の内容や主張を示しているはずだった「人道主義」と、「白樺派」という言葉の関係性は、無理に掛けられたボタンのような歪さを持つ。

本論文の目的は、来歴を示すわけでもなく、作品内容を示すわけでもない「人道主義」という言葉が、一体どこで白樺派と結びつくことになったのか、探ることにある。個々の作品、作家研究で、長い間否定され続けてきた、白樺派に對する「人道主義」という評価が、今日まで受け継がれた理由が、作品、作家研究の中でしか論じられなかったことであると仮定したうえで、別の面からのアプローチに挑戦してみたい。

2・大正五年前後の文壇状況

『文芸時評大系』の索引巻を参照すると、「人道主義」という語が評価の上で最も多く用いられたのは、一九一七「大正六」年だったことがわかる。ここでは、その流行の直前、一九一五「大正四」年に、「問題文芸」という用語が文壇において話題となっていたことに着目する。十川信介は、『編年体大正文学全集』第四卷（大正四年）の解説中で、「問題」は不明のままさまざまな理解が派生し、言葉だけが一人歩きを始めてしまった」としながら、総括して、「総論賛成、各論はまちまち」、「濃淡の差はあつても、そこから浮かび上がってくるのは、個人生活充実の連呼と同時に、その内容の抽象性であり、それを拡大したジャーナリズムの存在」であったとしている。「問題文芸」論を概括する上で、これ以上簡潔に主軸を捉えた文章にすることはできないだろう。しかし、

「人道主義」の流行を考える上では、「星湖は具体的な社会問題（事件）よりも「心理」ないし「心理描写」を主とし」ていたにも関わらず、「問題文芸」を「社会小説」と理解して一応の賛意を表わし、作者個人の生活を充実させることが社会問題にコミットする道だと考えている」人々がいたことを示す資料に目を向けたい。

一九一五「大正四」年九月発行『新潮』の「問題文芸」論特集には、小川未明の「私は今作家として取扱ふ問題文芸的題材の上に、二つの行き方があると思ふ。一つは人間とは何ぞやと云ふ昔からの人生問題の解釈から起つて来るさまじくな問題と、一つは現在の社会生活の上に於ける批判から生じて来るところの種々なる問題と、即ち此の二つである。（略）しかし乍ら其の何れにしても、之れを批判する中心点は自分自身である。（略）自分自身の感情、感覚、思想を通じて居なければ、総べての問題に意味はない」という言説がある。最終的に未明は、「最も主観的な立場に立つた時、問題文芸の生彩は發揮される」として、「主観」の前に、「人生問題」と「社会生活に於ける批判」を並立させている。同特集の近松秋江は、「私はさう際立つて問題文芸と云ふものを分類しなくても、普通人間の真理に深く入つて居る作品は、総べて其所に何等かの問題を提供して居ると思ふ」として、「金色夜叉」を例示し、「個人」の問題と「社会」の問題を同根と見ながら、「問題小説」を語る。これらの言説からは、「生活を充実させることが社会問題にコミットする道」といった論理展開は読み取れない。だとすれば、「問題文芸」論全体から言えることは、「生活」と「社会」のどちらにも目を配る姿勢があったことまで

であり、「個人生活充実の連呼」とまとめてしまうことで、「生活」と「社会」の關係を探る同時代のためらいが、見過ごされてしまうことになる。十川が「生活」の方に目を向けがちであるのには、この直後の評価軸について述べた論として、大野亮司の「神話の生成——志賀直哉・大正五年前後——」、山本芳明の『文学者はつくられる』が広く参照されているためであろう。⁹⁾一九一六「大正五」年前後の評価に目を向けると、大野が論文内で示したように、「生活態度」の充実を志向して、作者を高く評価するもの他に、その価値観を使つて、「思想的な生活と實際的な生活との二重生活を何の苦悶も無しに平気でやつてゐる（略）彼等はあまりに楽天的である。あまりに容易に正義を説き、人道を説き、神を説く」と作者を批判するものが見受けられる。大野は、作品が発表されない時期の志賀の生活態度について、「わずかに伝えられてくること、尾道や松江に現在滞在中とか今度我孫子に転居したとかいうことばかりであれば、志賀は今都会の喧騒を離れ、余裕ある環境で精神的にも肉体的にも自らを養っている」という解釈⁷⁾が生まれ得るとしている。しかし、武者小路の我孫子への転居は、管見の限り、思想の「生活化」というような文脈で読まれておらず、新しき村の計画まで待たなければ、「生活態度の充実」といった価値観で彼が好意的に見られることはない。本多秋五のいう「人道主義」の「頂点」であった「大正五・六・七年」¹⁰⁾において、「人道主義」者に対して与えられていたのは、「生活態度」に対する好評価ではなく、むしろ「生活」を重視する故の批判だった。ただしその批判は、長与善郎の「今の世は少しでも真面目な人間に人道主義者（普通の意味で）になる事を強める。言葉を換

へれば社会的な方面にも口を出す事を強める」という言葉からもわかる通り、単に「生活」のみを重視することによって生まれたものではない。この時期の文壇において、「生活」と「社会」両方に視線が向けられていたことは、「人道主義」流行の一因として挙げられるだろう。

「人道主義」流行についてさらに考察する為に、話をもう一度「問題文芸」論に戻す。「問題文芸」論は、「ジャーナリズム」によって拡大したことが十川に指摘されていた。同時代においては、「わが国の文学者は年一年と各自の生活に忠実になつて来たと言はれて居るけれども、而もそのうちの幾人が果して真にかの浅薄低劣なるジャーナリズムの暴力から脱して力強く独自の道を歩いて居るであらうか」と糾弾されている。もう一つ、「問題文芸」の「言葉だけが一人歩きを始めてしまった」状態を確認しておく。先にも引用した秋江の言葉のほかにも、相馬御風が、中村星湖の言葉として、「問題小説と云つて殊更そんな物の書けやう筈がない、いつもの作と同じ態度で書けばそれで好いのだ、佳い作品は凡て佳い問題文芸だと云へるんだから」という言葉を残している。この「ジャーナリズムの跋扈」への指摘、またどんな作品をも受け入れることのできる定義の曖昧さは、「人道主義」に対して与えられていた言葉と非常に近い。

「人道主義」とか「人道主義者」とかいふ名前が誰々に相応するのしなのと言つて騒いでゐるには及ばぬと思ふ。見渡した所、「おれは人道主義を奉ずる」とか「おれは人道主義者だ」とか言つて威張り返つてゐる者は無いやうである。あ

れは誰やとも言つた通り雑誌の経営者が、うまく機先を制してやらうと言ふ商略とほんとうに新しい機運を起してみたいといふ誠実とから付けた名前だらうと思ふ。名は付けてみたが定義の下しようが無くて（有つても誰も知つてゐる極り切つた定義で）困つてゐるやうな場合である。「人道主義」の旗幟のもとに利己主義者も偽善者も集まるであらう、臆病者が仮面を見付けたやうに、烏が孔雀の尾を植ゑたやうに。

「問題文芸」論について論じる先行研究は、管見の限り、三本に止まる。その理由としては、先に挙げたような問題点や、たった一年の間にその言葉が用いられなくなることにあるだろう。しかし、本論文第一節で国語便覧を用いて確認したように、「人道主義」という言葉は、未だに白樺派と並べて高頻度で使われている。危うい立ち位置の「問題文芸」論と同様に、「人道主義」が、自然に生まれてきたものではなく、「人道主義とは如何いふものを指して云ふのか、それを説明せよと云はれても、自分は知らないと答へる外ない」とまで言わしめるものであったことを看過することはできない。同時代から「定義の下しようが無」い空疎な言葉として扱われていたにもかかわらず、白樺派評価の常識として引き継がれてきた「人道主義」という言葉は、現代において、白樺派の多彩な魅力を塗り潰す言葉としてしか機能し得ないのではないだろうか。

ここまで確認してきた資料は、「人道主義」流行と直接的に結びつくものではない。ただ、資料の読み方によつては、「人道主義」と短絡的に結びつきかねない「生活態度」、「社会へのコミッ

ト」といった言い回しと白樺派が、いかに結びつきづらいものであったのかということを見直してきた。次章では、「人道主義」という評価が白樺派といつ結びつき、それについて彼らがどのようなに反応していたのかを確認する。

3. 「人道主義」と白樺派の交点

白樺派と「人道主義」が直接的に結びつけられる最も初期の例は、管見の限り、一九一六「大正五」年十月の『新潮』に掲載された、赤木桁平の「白樺派の傾向、特質、使命」である。まずは、その赤木論以前に、白樺派がどのように評価されていたかを確認していく。初期白樺派の認識としては、一九一一「明治四十四」年一月に、平出修が主催した「反自然主義大同団結問題」の会合に白樺派が勧誘され、乗り気ではなかったにしろ、『スバル』や『三田文学』の面々と共に参加していたことが参考にできるだろう。志賀の回想に、「自然主義は明治三十八年頃に起つたのであらうが、その後武者小路など盛んに自然主義を攻撃してゐたから世間では、僕等は反自然主義のディレッタンチズムの仲間のやうに思つてゐたらしかつた」¹⁹といった言葉もある。会合の約一年後に白樺派に与えられた評価には、『白樺』と他の雑誌を一括した上でのもので、留保を加える必要があるものの、「自然派文芸と対照」して「積極的傾向が著しい」²⁰とするもの、また、志賀や里見の評価を主軸に据えて、「病的な心理」「病的な精神作用」を好んで取り扱う集団として扱うものがある。²¹とくに後者は、国語便覧で与えられていた「人道主義」「理想主義」という評価とは、

ベクトルが異なり、興味深い。この後に、「素朴」や「純真」といった評価が出てくるものの、白樺派を「人道主義」的な人々として扱うものは赤木論以前には見受けられない。²²

赤木論では、「個々の作家に於ける特質なり傾向なりの如何に就いては、かなり精到なる研究を遂げてはゐるが、一個の統体的な攻殻をも見出すことが出来ない」として、先に引用してきたような細々とした評価はほとんど問題にしていない。引き継がれるのは、「自然主義的人生観及び享楽主義的人生観に対する反動」という言葉から見られる、アンチ自然主義としての立ち位置だ。以下に赤木が白樺派の評価を端的に示す部分を引用する。

白樺派の文学は、その本質的方面に於いて著しく人道主義的であり、その形式的方面に於いて著しく無技巧的であると云へる。而して、その本質的方面に於ける特質たる人道主義的傾向が、事実²³に於いて、白樺派といふ臆氣な觀念を構成するために、最も肝腎なる要素であることも、またことごとしく云ふまでもない。²⁴

ただ同文中、「人道主義」に対して、「人生肯定」以上の説明はなく、また、白樺派の「芸術観」を「徹頭徹尾自己建設と自己築造とに終始する」、「主張の芸術」である」ともしている。この論の中で、白樺派の語られ方は、決して「人道主義」のみに焦点化したものではなかったが、これ以降、赤木論の影響を受けてか、白樺派を「人道主義」とする評価が増える。²⁵また、「文学史上に

有する白樺派の意義」を明らかにしようとして、赤木は、「自然主義文学（略）」「三田文学」の一派を以て代表すべき享楽主義の文学（略）そこには何等の精神的要求に培はれた芸術を見出すことが出来なかつた。——この事実が芸術をその理想的意義に於いてのみ認めようとする一派（＝白樺派……引用者補）の青年にとつて、その奮起と猛進とを催促した」と彼らの出自を説明している。そして、「不真面目なる低級芸術が跋扈して、ますますその猛威を振はんとする時に当つては、如何なる意味に於いても、白樺派のごとき真剣なる芸術家の群れを孵み育てることが、当然、芸術に携はるもの、責務である」と述べた。この意味を考察するために、「白樺派の傾向、特質、使命」の二ヶ月前に『読売新聞』に掲載された、同じく赤木が執筆する「遊蕩文学」の撲滅」を見ていく必要がある。

「文学を道義的、社会風教的な立場から見ようとする」⁽²⁶⁾この言説は、簡単にまとめてしまえば、「人間の遊蕩生活に纏絡する事実と感情とに重きを置いて、人性の本能的方面に於ける放縱淫逸なる暗黒面を主題とし、好んで荒色耽酒の惑溺境を描出せん」とする「遊蕩文学」に対する反感を表明し、「予の芸術に対する理想と諸氏のそれとは到底両立しない⁽²⁷⁾」と、作家の名前を挙げて批判するものである。「遊蕩文学」の撲滅」で語られる理想は、「予は自己をより善くし、より完きものにしようとする努力のもとにのみ、真当の意味の芸術が生れて来ると信じてゐる。而して、かくのごとき努力は、人生に対する真摯なる考察と誠実なる態度と、素朴なる感激とに依つてのみ孵まれ、遍満せる倫理的意識に依つてのみ育て上げられる」といった言葉から、読み取ることが

できるだろう。「白樺派の傾向、特質、使命」で語られていた白樺派は、先に引用したように、「自然主義的人生観及び享楽主義的人生観に対する反動」であり、「熾烈なる人生肯定の上に立ち、理想の至高内容を求めて「愛」の生活を主張し、最も普遍的にして、また、最も一般的なる人道主義の建設を夢見」るものとも言われていた。「白樺派の傾向、特質、使命」で語られた白樺派が、遊蕩文学を撲滅する武器としての、赤木の「芸術に対する理想」と、一定以上の距離を保っていたとは考えられない。

最後に、赤木論文を契機として、広く「人道主義」として扱われ始めた白樺派の作家たちが、その評価にどのような反応を示しているのかを引用する。志賀直哉は、後年の回想の中で、「人道主義と他からいられる色彩が余り濃くなつてからは居心地が悪くなつて」⁽²⁸⁾と違和感があつたことを語り、有島武郎もまた、以下のような皮肉めいた言葉を残していたということが、教え子の著書から窺われる。

堺君は私に長い文を書いて添へると云つて下さる。堺君は無道徳的唯物主義者を以て自ら任じて居られるので、私が近頃実質以上に文壇の流行児（？）になつてゐるのに見込みを附けて、少しでもそれを利用して本を沢山売り出さうといふ魂胆なのだ。所が私は「愛」教の盲信者で同時に人道主義者なのださうだから、立どころに数万言を連ねて之れに応ずると思ひの外原稿紙六枚で御免を蒙る事にする。人道主義者の方が唯物論論者よりも余程狡い。狡い積りではないが知らない事はさすがの人道主義者にも書けない⁽²⁹⁾。

この二つは年代の差もあり、直接的な反応とは言い難いが、武者小路については、「人道主義」と云ふ言葉を私はあまり使ったことはありません。まして私は人道主義者ですと云つた覚えはありません。従つて人道主義と云ふ言葉の意味もどう云ふ意味で或人々が使つてゐるかよく知りません。殊に私達をさして人道主義の作家と云はれるのはどう云ふ意味かよくわかりません³⁰というリアルタイムでの反応を見る事ができる。

前節で、「見渡した所、「おれは人道主義を奉ずる」とか「おれは人道主義者だ」とか言つて威張り返つてゐる者は無い」という認識の存在を確認できる資料を引用したが、「威張り返る」どころではなく、戸惑いの声すらも見受けられる。しかし、先の武者小路の反応が掲載された『新潮』に、三か月後には、「武者小路実篤氏が、自然主義衰頹後の文壇に、新らしき人道主義的芸術を勃興せしめて、清新澗冽たる空気を輸入させた効はもはや何人も否定し得ない事実である³¹」といった広告が掲載されている。さらにもう一つ、「人道主義」という評価への反発の言葉が、ほとんどないがしろにされてしまつていたことを示す資料を引用する。

他から人道主義者と呼ばれてゐる人々が、どれだけ人道主義者の称呼を値してゐるかは暫く措く。ともあれ、彼等所謂人道主義者連が、他から下された此称呼もしくは分類に、抗議を持ち出すらしき顔付きで言つてゐる言葉は、私共を以て見れば、かなり滑稽な、理屈にもならない理屈といふものであります。(略)所謂人道主義者諸君にとつて、斯く呼ばれる

ことが好都合であるかどうかはそれほど大切な事でない。私共は私共観察者批評家の立場から見て、斯く呼ぶことの正當なるを思へば、諸君がいかほど迷惑に感じられやうも、そんな事に頓着なく諸君を人道主義者と呼ぶつもりであります³²。

「人道主義」という言葉が、「誰によつても明確に説明され³³」ていなかったにもかかわらず、「観察者批評家の立場から見て、斯く呼ぶことの正當なるを思ふ」ことが可能だったはずがない。それでも、この惨い評価は、現代の国語便覧にまで継がれていく、「正當なる」ものとして残つていつてしまふ。

この節では、白樺派と「人道主義」評価の交点、またその評価に対する彼らの戸惑いを確認した。最後に、「人道主義」という評価が浸透する一因となつたであろうトルストイの流行と、トルストイアンとして名高い武者小路実篤が、当時どのように関わっていたのかを見ていく。

4・トルストイと人道主義

大正中期の「人道主義」流行への言及の際、多く、同時期にトルストイが流行したことについても語られる。先に引いた、本多秋五の「白樺」と人道主義」内では、「人道主義の盛行は、實際またトルストイの流行と相携えていた。日本におけるヒューマニズムならぬ「人道主義」なる言葉そのものが、もともとトルストイの教説の輸入と結びついて行われた言葉と考えられるのだが、なかならず「白樺」派の人道主義はトルストイと因縁ふかいもの

であった³⁴⁾としてゐる。「因縁」とは、端的に言えば、武者小路実篤に「トルストイ心酔時代」があったことと、「白樺」派の人々は、「白樺」の創刊以前において、武者小路から一応トルストイズムの洗礼をうけていただろうと考えられる」という二点だろう。ただ武者小路の「思想の流れ」に「トルストイ心酔の自己犠牲的な救済者意識から、自我実現第一の芸術至上主義への転化」があったことを挙げて、「大正中期における「白樺」派のトルストイ的人道主義は、その「白樺」派以前の「白樺」派における人道主義の直接的延長ではなかった」としている。本多論の中では、大正中期の「人道主義」的作風とトルストイの間には、「相携える」以上の接続は語られていないと言えよう。しかし、同論で引用されている資料に、「人道主義とトルストイズムを一項目にくくっている」ものがあることは無視できない。山川菊枝が一九一六「大正五」年九月に『新社会』で発表した、「流行文芸に心酔する現在青年の心理」では、「近頃の文芸かぶれの青年は左の五種に大別する事が出来（略）第三種は安価な人道主義の水同様の手製の酒に陶然として居るセンチメンタルなトルストイアンである³⁵⁾」とある。先にも引用した『新潮』の「当来文芸の基調たらんとする人道主義に対する批判」という特集が、一九一六「大正五」年十一月号のものであったことを考えれば、本多の言う通り、この言葉は、トルストイに限った言及ではなく、二つの流行を「一項目にくくって」語る言説だと捉えるべきだろう。ただ、「人道主義の代表的作家」と目されていた武者小路の「トルストイ心酔」時代は既に終わっている。本節では、トルストイの流行と「人道主義」との流行が、実際にどれほどの関係性をもったものだった

のかを確認していきたい。

大正中期のトルストイ流行について語る際、必ずと言っていいほど言及される『トルストイ研究』という雑誌があり、法橋和彦がこの雑誌について簡潔に説明している。同文内では、編集を「トルストイ会」としているが、より厳密に言えば、新潮社に勤めていた加藤武雄が担当していた。彼の後年の回想や『トルストイ研究』の編集後記を見ると、この雑誌が、編集者の予想以上に人々の耳目を集めていたことがうかがえる。このように多くの人々に受け入れられる要因として、法橋は「芸術座の舞台活動に負うところが多い」としている。

芸術座は、「西欧の近代劇を上演すること、その普及化、芸術倶楽部の創立とそこでの研究公演、女優松井須磨子の育成³⁶⁾」を構想していた。いくつかの公演を経た後、一九一四「大正三」年三月に帝劇でトルストイの『復活』を上演して、大きな反響を得ている。一九一四「大正三」年から一九一八「大正七」年までの間に、「日本内地はもとより台湾満州の外地までなんと四四四回の上演を記録し³⁷⁾」、事前宣伝活動から用いられている、劇中歌の「カチューシャの唄」は職業や階級を越えて親しまれたと言う³⁸⁾。多くの人々にとって、舞台の『復活』はある程度身近な存在であり、舞台の間口を引き継いだ形で『トルストイ研究』が受容された可能性はあるだろう。

一方、『トルストイ研究』の内容だが、先に紹介した法橋の文章中に、「独創的な新研究と世界的規模におけるトルストイ案内、ならびに討論に灼熱の感ある舞台を提供した」という言葉があり、柳富子は「きわめて多彩で啓蒙的であり、かつ真摯で熱気が籠っ

ている⁴³」と評価している。ただ、それに加えて柳は、「トルストイの讃仰にのみ終始しているわけではない」と、「牽引と反発」の例として、広津和郎の「怒れるトルストイ」などを示していた。その内の一つとして、「今後又トルストイの処に帰るか、他の教のもとに入るか或は自分を最も自由に正しく生かせる道を自分の足の下に直接見出すか、それはまだわからない」と語る、武者小路の「トルストイに就いて」⁴⁴が挙げられている。柳は「トルストイをめぐって思いぞ屈する姿が目につかぶ」と、他の文章の「牽引と反発」と同列に並べて武者小路の言説を語った。ここで確認しておきたいのは、トルストイという観点で見た時、「牽引と反発」を示す武者小路に、特権視する要素はどこにもなかったにも関わらず、『トルストイ研究』という雑誌が、彼を埋没させなかったことである。『トルストイ研究』は、基本的にトルストイに関連したものを論じ、紹介する場で、言葉を変えれば、他者の思想について語る雑誌だった。その中で、一九一八「大正七」年八月の『トルストイ研究』には、武者小路の「新しき村」の生活の序文」が掲載されている。同号の編集後記には、「武者小路実篤氏は、その理想郷を建設す可く、將に「新しき村」の経営に着手せられんとしつゝ、あります。而して「新しき村」についての同氏の主張と企画とは、今度「新潮社」から出た「新しき村の生活」の一書中に、詳細に説かれてあります。本誌に掲げたのは、同書の序文であります⁴⁵」と紹介がある。武者小路が新しき村について語り始めたのは一九一八「大正七」年五月からであり、このようにリアルタイムで反応している資料はかなり少ない⁴⁶。多くの言説と同様に、トルストイへの「牽引と反発」を語っている武者小

路の、まして、まだ大した反響のない「新しき村」についての文章を掲載することは、他の『トルストイ研究』内の文章と比較すると、異質な扱いだと言えよう。この扱いの意味について考えるために、『トルストイ研究』の発表媒体である、「トルストイ会」の広告、同誌創刊号の編集後記、また、『トルストイ研究』に掲載されていた、『新しき村の生活』⁴⁷についての広告文を参照する。

①トルストイ会は、トルストイ研究を目的とする。しかも、トルストイの名は人生のすべてを掩ふところの大なる名である。トルストイ会の期するところは最も広い意味に於ての人生研究でなければならない。少なくともトルストイ研究と人道主義研究とは異語同義である⁴⁷。

②本誌は必ずしもトルストイその人に直接した研究をのみ旨とするのではない。最も広義なる意味に於ての人道主義——といふやうなものに、其の標的を置くつもりです。真摯に人生を思ふもの「いかにして最もよく生くるか」を思ふ者のために伴侶となり度い、出来るならば新人道主義の機関として、混沌たる現下思想界の一角に一道の光明を掲げ度いと思ふのであります⁴⁸。

③如何にして正しく活くべき乎之を本書に聞け（略）白樺派の重鎮として、人道主義者の領袖と目されて來た武者小路実篤氏は、單なる芸術家として甘んずるの人では無かつた。氏は、その熾烈の精神を実行に駆つて自らの理想に邁進せ

んと企て、こゝに「新しき村」の計画を発表された。(略) いかにして活く可きかを思ひ煩ふものは、必ず本書を読まなければならぬ。⁴⁹⁾

①において、「トルストイ研究」と「人道主義研究」は異語同義とまで言われており、先に引用した山川菊枝の「一項目にくく」る語り方が、批判の言説だけでなく、広告文にまで用いられていたことがわかる。そして、②「トルストイ研究」創刊号の「いかにして最もよく生きるか」と、③『新しき村の生活』の広告文、「如何にして正しく活くべき乎之を本書に聞け」という言葉の重なりも、無視できるものではない。武者小路が、トルストイや「人道主義」と一定の距離を保った上で発言をしていたことは、先にも述べてきたが、当人の言葉を置き去りに、これらは一直線上に並べて置かれている。「中心的な存在の一つでもあつた新潮社」の振る舞いは、武者小路の評価を固める一つの要因になり得たであろう。

これ以上は蛇足になるが、新潮社とトルストイの関わりについてもう一つだけ述べておく。先に、芸術座の舞台「復活」のヒットがあつたことを述べたが、佐藤義亮は、「労働者・サラリーマンの平均月収」が「三十円」⁵⁰⁾だった時代に、「千円⁵¹⁾の金、すなわち労働者年収の二・五倍超の金額を出資し、「脚本の出版も引き受けた」、いわばメインスポンサーと言える存在だった。現物は未確認だが、縮刷改版の『脚本復活』は一九一八「大正七」年十二月にも出版されており、⁵²⁾ 相関的な利益関係は、トルストイ、「人道主義」の両者に留まらず、『脚本復活』まで視野に入れられ

て考えられるだろう。

ここまでで本論文は、白樺派が現在もお引き受ける「人道主義」という評価と、その周縁を見て来た。「人道主義」という評価と向き合つた時に見えて来たのは、その言葉の周縁情報、例えば、第一次世界大戦やトルストイ、大正デモクラシーと言つたものは非常に多いものの、「人道主義」という言葉自体が示すものが非常に曖昧であるということだ。意味が定まらないままに流通し、瞬く間に白樺派と密着したこの言葉が求めるのは、「社会的な方面にも口を出す」ことであり、折悪しく、「人格主義的パラダイム」という、作家の生活態度を重視する価値基準の誕生とも重なって、「人道主義」者には、過剰な期待が寄せられていたと言えよう。その上に、どのような言説も、生活が伴わないという理由でもって批判されてしまう時代だったとすれば、新しき村の構想が発表されたことには、『白樺』派の人道主義が、まさしく嫡出子として生んだところの、大きな特異児童⁵³⁾という無邪気な視点からの評価はそぐわない。むしろ、言説に対する期待が薄くなったという説明の方が、状況に寄り添つたもののように思える。新たな論点から語りなおす事はできず、外部情報との接続を見ることもできなかったが、成果として、空白でできた「人道主義」という言葉が、一本の論文をきっかけに白樺派と強く結びつき、評価の方法を定めてしまったその瞬間を切り取つたことが挙げられよう。先行研究の道筋を辿りなおす形とはなつたものの、今後白樺派評価の変節点を継続して調査し、戦後の『近代文学』派による評価まで含みこんだ形の白樺派評価の展望を目指していきたい。

【注】

- (1) 調査は二〇一四年五月に行っており、古い順から、前田治男『総合国語研究要覧』（桜井書店、一九五三「昭和二十八」年（月記載なし））、全国教育図書株式会社編『資料国文図録』（全国教育図書、一九六四「昭和三十」年十月）、日栄社編集所編『総合国語学習要覧』（日栄社、一九六六「昭和四十二」年四月）、清田清ほか『国語便覧』（明治書院、一九六九「昭和四十四」年三月）、青木一男『現代国語便覧』（評論社、一九七五「昭和五十」年（月記載なし））、鈴木知太郎、水島義治編『必携国語国文学要覧』（桜楓社、一九七七「昭和五十二」年三月）、進学社編集部編『活用国語便覧』（進学社、一九八〇「昭和五十五」年（月記載なし））、加藤道理ほか編著『常用国語便覧』（浜島書店、一九九六年「平成八年」一月）、国語教育プロジェクト（代表・仲光雄）編著『原色シグマ新国語便覧』（文英堂、一九九八「平成十」年二月）、内田保男、石塚秀雄編『新国語要覧』（大修館書店、二〇〇〇「平成十二」年四月）、西原和夫ほか編著『新総合図説国語』（東京書籍、二〇〇一「平成十三」年二月）、秀学社編集部編『新国語便覧』（秀学社、二〇〇二「平成十四」年（月記載なし））、稲賀敬二、竹盛天雄、森野繁夫監修『カラー版新国語便覧』（第一学習社、二〇一〇「平成二十」年二月）、青木五郎、武久堅、坪内稔典、浜本純逸監修『クリアカラー国語便覧』（数研出版、二〇一二「平成二十四」年二月）、井筒雅風、内田満、樺島忠夫ほか編『国語図説』（京都書房、二〇一四「平成二十六」年一月）。東京書籍からは同年同月、中洲正晃ほか編『新詳説国語便覧』が出版されているが、人道主義への言及が多い『新総合図説国語』を採用した。
- (2) 井筒雅風、内田満、樺島忠夫ほか編『国語図説』（京都書房、二〇一四「平成二十六」年一月）。以降の引用において、全てのルビ、傍点を省略する。また、傍線は引用者による。
- (3) 前田治男『総合国語研究要覧』（桜井書店、一九五三「昭和二十八」年（月記載なし））。
- (4) 日栄社編集部編『総合国語学習要覧』（日栄社、一九六六「昭和四十二」年四月）。
- (5) 以下の計九冊。『総合国語研究要覧』、『総合国語学習要覧』、『国語便覧』、『常用国語便覧』、『原色シグマ新国語便覧』、『新国語便覧』、『カラー版新国語便覧』（この便覧はヒューマンリズム文学としている）、『クリアカラー国語便覧』、『国語図説』。
- (6) 宗像和重編『文芸時評大系大正篇』別巻（ゆまに書房、二〇〇七「平成十九」年三月）の中では、一九一三「大正二」年から一九二六「昭和元」年までの間に、百二十九例を見ることができ。最も多く「人道主義」という言葉が使用されている年は、一九一七「大正六」年の二十五例で、その前後を見れば、一九一四「大正三」年がゼロ、一九一五「大正四」年が二例、一九一六「大正五」年が六例、一九一八「大正七」年が十七例となる。
- (7) 小川未明「総ゆる問題は自己の生活にあり」（『新潮』一九一五「大正四」年九月）。
- (8) 近松秋江「問題は深さに依つて生ず」（引用元は注（7）と同じ）。

- (9) 大野亮司「神話の生成——志賀直哉・大正五年前後——」
『日本近代文学』一九九五〔平成七〕年五月、山本芳明「文学者はつくられる」(ひつじ書房、二〇〇〇〔平成一二〕年十二月)。
- (10) 青頭巾「安撫なる理想主義者」(『新潮』一九一六〔大正五年八月〕。また、江口渙「要するに人道主義の低級作家か(武者小路実篤氏の『或る青年の夢』を讀みて)」(『星座』一九一七〔大正六〕年三月)も同様の批判をしている。
- (11) 本多秋五「『白樺』と人道主義」(初出は『日本文学講座Ⅵ 近代の文学後期』(河出書房、一九五〇〔昭和二十五〕年十二月)。
- (12) 長与善郎「運命について及び其他」(『白樺』一九一七〔大正六〕年六月)。
- (13) 相馬御風「興味中心の文壇」(『早稲田文学』一九一五〔大正四〕年九月)。
- (14) 相馬御風「問題文芸についての対話」(引用元は注(7)と同じ)。
- (15) 中村星湖「本年の創作を顧みて(三)」(『時事新報』一九一六〔大正五〕年十二月六日)。また、加能作次郎「一月の文壇」(『太陽』一九一七〔大正六〕年二月)も同様の指摘をしている。
- (16) 十川論のほかに、川合大輔「問題文芸」論の位置と問題点——土田杏村の「問題文芸」論批判を手がかりにして——「『哲学と教育』二〇一一〔平成二十三〕年三月」と、榎本隆司「問題文芸論」について(『国文学研究』一九六〇〔昭和三十一年十月])が確認できる。
- (17) 「当来文芸の基調たらんとする人道主義に対する批判」(『新潮』一九一六〔大正五〕年十一月)内の、森田草平「当来の文芸としての人道主義」。
- (18) 渡辺善雄は、この会合についての論文を「森鷗外と『白樺』派——反自然主義四誌合同の画策と挫折をめぐって——」(『文芸研究』一九七六〔昭和五十一〕年一月)と名付けているが、『定本平出修集』第三卷(春秋社、一九八一〔昭和五十六〕年七月)に、「反自然主義大同団結問題メモ」があるため、本稿ではそちらの名称を採用する。
- (19) 志賀直哉「書き初めた頃」(初出は『文学の世界』一九四八〔昭和二十三〕年五月。原題は「書き始めた頃——稲村雑談——」。引用元は『志賀直哉全集』第八卷(岩波書店、一九七四〔昭和四十九〕年六月)。
- (20) 加能作次郎「二月文壇評」(『早稲田文学』一九二二〔明治四十五〕年三月)。
- (21) 弾正台「四十五年劈頭の創作」(『新潮』一九二二〔明治四十五年二月])。
- (22) 堺戸生(氏名未調査)「三月の創作と評論」(『やまと新聞』一九一六〔大正五〕年三月十九日)、紅楓生(氏名未調査)「十月の文壇 白樺」(『やまと新聞』一九一六〔大正五〕年十月十三日)。
- (23) 武者小路実篤について言えば、一九一三〔大正二〕年七月九日の「読売新聞」、本間久雄が執筆した「七月の『評論』(上)」内に、「真の意味のイゴイストは真の意味のヒューマニストで

なくてはならない」と彼の論旨を解釈するものが既に存在している。一九一五「大正四」年四月号『文章世界』内の、山田檳榔「三月の文壇」でも、「その妹」を評価する際に「気高い人道主義が全篇を貫いてゐる」とされていた。ただし、白樺全般を「人道主義」とみなす動きは確認できない。

(24) 赤木桁平「白樺派の傾向、特質、使命」(初出は『新潮』一九一六「大正五」年十月。引用元は、赤木桁平『芸術上の理想主義』(洛陽堂、一九一六「大正五」年十月)。

(25) 江馬修「恐ろしい言葉!」(『新潮』一九一六「大正五」年十一月)や、近松秋江「創作の一年間」(『文章世界』一九一七「大正六」年一月)。また、和辻哲郎「文壇は果して不振である乎」(『新小説』一九一六「大正五」年十二月)は、白樺派を一つの流れとして語ることに反発を示しており、逆説的に、白樺派と「人道主義」の同一視が、この時期から始まり、ある程度受け入れられていたことが推測できる。

(26) 長谷川泉編『近代文学論争事典』(至文堂、一九六二「昭和三十」年十二月)の項目、「遊蕩文学」論争より。引用部分の執筆者は中野博雄。

(27) 赤木桁平「遊蕩文学」の撲滅」(初出は、『読売新聞』一九一六「大正五」年八月六日。引用元は、注(24)と同じ)。

(28) 志賀直哉「私はかう思ふ」(初出は『文芸』一九五二「昭和二十」年六月。引用元は『志賀直哉全集』第九卷(岩波書店、一九九九「平成十二」年八月)。

(29) 有島武郎「あとがき」(初出は、堺利彦訳『野生の呼声』(叢文閣、一九一九「大正八」年五月)。引用元は、堺利彦訳

『世界名作文庫 四二五 野生の呼声』(叢文閣、一九三六「昭和七」年十二月)。

(30) 武者小路実篤「人道主義」に就て」(『新潮』一九一六「大正五」年十一月)。

(31) 一九一七「大正六」年二月の『新潮』に掲載されている、

『代表的名作集武者小路実篤氏作第二十三集その妹』の広告文。

(32) 生田長江「主義問題に関する悪常識」(『中央文学』一九一七「大正六」年五月)。

(33) 加能作次郎「一月の文壇」(『太陽』一九一七「大正六」年二月)。

(34) 注(11)と同じ。

(35) 青山菊栄「俺が」「俺は」「俺の」「俺に」(『新社会』一九一六「大正五」年九月)。

(36) 注(10)の江口論より引用。

(37) 法橋和彦「日本におけるトルストイ(十七)」(『トルストイ全集』第十四卷「月報」十七(一九七三「昭和四十八」年十二月)。

(38) 加藤武雄「横顔——わが文壇生活回顧」(『文章倶楽部』一九五〇「昭和二十五」年六月)。

(39) 一九一六「大正五」年十月の『トルストイ研究』においては、「一と度市上に出づるや予想外の売行で翌日にはもう悉皆売切れて了りました」と、また、一九一七「大正六」年一月発行の『トルストイ研究』では、「或る料理店の下足番のお爺さんが、客を待ち乍らしきりに読んでゐるのを何かと見れば、『トルストイ研究』であつた、といふ話をきいて、記者は一種

の感動に撃たれざるを得なかつた」と、広く受け入れられていることを喜ぶ声が見受けられる。

- (40) 『日本近代文学大事典』第四卷（講談社、一九七七「昭和五十二」年十一月）の項目、「芸術座」より。引用部分の執筆者は尾崎宏次。

- (41) 注(37)に同じ。

- (42) 永嶺重敏『流行歌の誕生——「カチューシャの唄」とその時代』（吉川弘文館、二〇一〇「平成二十二」年九月）に詳しい。

- (43) 柳富子『トルストイと日本』（早稲田大学出版部、一九九八「平成十」年九月）。

- (44) 武者小路実篤「トルストイに就いて」（『トルストイ研究』一九一六「大正五」年十一月）。

- (45) 無記名「編集者より」（『トルストイ研究』一九一八「大正七」年八月）。

- (46) 管見の限りでは、有島武郎の「武者小路兄へ」（『中央公論』一九一八「大正七」年七月）、片葉芋一の「新秋の各雑誌」（『東京日日新聞』一九一八「大正七」年九月九日）の二つ。

- (47) 無記名「トルストイ会より」（引用元は、生田長江訳『我が宗教・トルストイ叢書(1)』（新潮社、一九一六「大正五」年九月））。

- (48) 無署名「編集者より」（『トルストイ研究』一九一六「大正五」年九月）。

- (49) 『トルストイ研究』一九一八「大正七」年八月号に掲載されていた広告文より。

- (50) 注(38)と同じ。

- (51) 池内輝雄「解説 一九一四（大正三）年の文学状況・展望」（池内輝雄編著『編年体大正文学全集』第三卷（大正三年）ゆまに書房、二〇〇〇「平成十二」年九月）。

- (52) 佐藤義亮「出版おもしろ話」（初出は新潮社出版部編『新潮社四十年』（新潮社、一九三六「昭和十二」年十一月）。引用元は、佐藤義亮ほか『出版巨人創業物語』（書肆心水、二〇〇五「平成十七」年十二月））。

- (53) 滋賀県立大学図書館センターの所蔵目録に、『脚本復活』縮刷改版（新潮社、一九一八「大正七」年十二月）がある。

- (54) 注(11)と同じ。

（なかやま・かな

千葉大学大学院人文社会科学科博士前期課程二〇一五年修了）